

## 第2部 1970年代までの当別

## 第1章 当別町の遺跡

### はじめに

石狩低地帯とは、石狩平野から勇払平野に連なる低地帯のことで、札幌－苫小牧低地帯ともいわれる。当別町はこの北部、石狩平野を流れ日本海に注ぐ石狩川下流域右岸に位置する。道内一の大河である石狩川は、国内でも2番目の流域面積を持っており、北海道の中央部を南北に切り裂くように、大雪山から旭川盆地、神居古潭<sup>かむいこたん</sup>を経て石狩低地帯へと流れ下る。また、その支流である千歳川は支笏湖に源を発し、石狩低地帯南部を北流して、石狩川に注いでいる。

石狩低地帯を中心に、当別付近を含めた石狩低地帯周辺の遺跡について、時期ごとの分布を示した（後述の図5-1～8）。本章では当別町内の遺跡について概要を示し、次いで時期ごとに石狩低地帯の自然環境、歴史的背景をたどりながら、各遺跡の位置づけについて考える。

### 第1節 遺跡と出土遺物

#### 周知の遺跡

当別町に入植が行われる前から、この地には縄文文化からアイヌ文化まで続く、多くの人々の長い歴史があった。それを物語るのが遺跡であり、その中でも町内で唯一本格的に発掘調査が行われた伊達山1遺跡は、多くの人たちにその名が知られている。

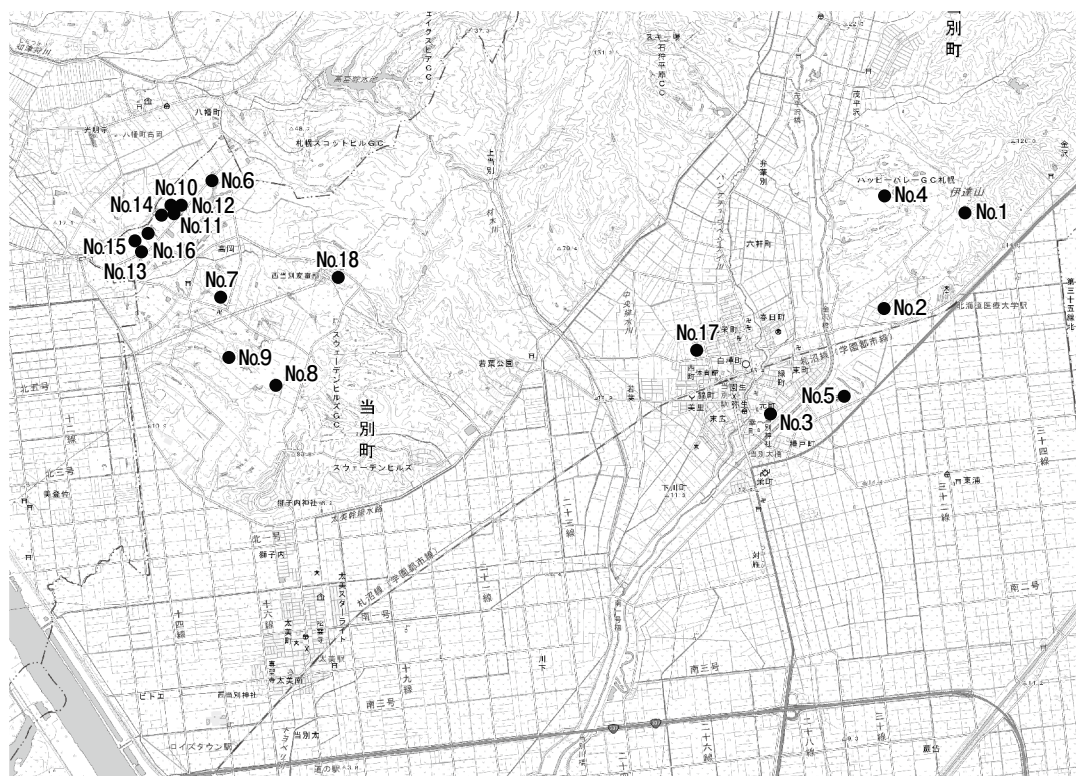
当別町では、現在18カ所の遺跡（行政的な取り扱いでは「埋蔵文化財包蔵地」と呼ばれる）が北海道教育委員会と町教育委員会の遺跡一覧表に登載されている（次頁表1）。登載番号は伊達山1遺跡（A-07-1）のように、A（石狩）-07（当別）-1（遺跡No.）となっている。以下、伊達山1遺跡〔No.1〕または〔No.1〕のみの記載とする。

表1 町内の遺跡一覧

| No. | 遺跡名    | 種別    | 住所   | 縄文 |    |    |    |    | 縄文 | 擦文 | アイヌ | 出土遺構・遺物等      | 備考          |
|-----|--------|-------|------|----|----|----|----|----|----|----|-----|---------------|-------------|
|     |        |       |      | 早期 | 前期 | 中期 | 後期 | 晩期 |    |    |     |               |             |
| 1   | 伊達山1   | 住居跡   | 字上当別 |    |    | ●  | ●  |    |    |    |     | 住居跡、土器、石器各種   | S39・40調査    |
| 2   | 伊達山2   | 遺物包含地 | 字茂平沢 | ●  |    |    |    |    |    |    |     | へら状石器、石錘、石斧等  |             |
| 3   | 当別神社裏  | 遺物包含地 | 元町   |    |    |    |    |    |    |    |     | 石斧2           |             |
| 4   | 茂平沢    | 遺物包含地 | 字茂平沢 |    |    |    |    |    |    | ●? |     | 擦文土器?         |             |
| 5   | 樺戸通    | 遺物包含地 | 樺戸町  |    |    |    |    |    |    | ●  |     | 擦文土器、須恵器      |             |
| 6   | 当別高岡1  | 遺物包含地 | 字高岡  | ●  |    |    |    |    |    |    |     |               |             |
| 7   | 当別高岡2  | 遺物包含地 | 字高岡  |    | ●  |    |    |    |    |    |     | 石錘            |             |
| 8   | 当別高岡3  | 遺物包含地 | 字高岡  |    |    |    |    |    |    |    |     | スクレーパー        |             |
| 9   | 当別高岡4  | 遺物包含地 | 字高岡  |    |    |    |    |    |    |    |     | 石斧4           |             |
| 10  | 当別高岡5  | 遺物包含地 | 字高岡  |    |    |    |    |    |    |    |     |               |             |
| 11  | 当別高岡6  | 遺物包含地 | 字高岡  |    |    |    |    |    |    |    |     |               | 石狩 石狩高岡90から |
| 12  | 当別高岡7  | 遺物包含地 | 字高岡  |    |    |    |    |    |    |    |     |               | 石狩 石狩高岡91から |
| 13  | 当別高岡8  | 遺物包含地 | 字高岡  |    |    |    |    |    |    |    |     |               | 石狩 石狩高岡92から |
| 14  | 当別高岡9  | 遺物包含地 | 字高岡  |    |    |    |    |    |    |    |     |               | 石狩 石狩高岡93から |
| 15  | 当別高岡10 | 遺物包含地 | 字高岡  |    |    |    |    |    |    |    |     |               | 石狩 石狩高岡94から |
| 16  | 当別高岡11 | 遺物包含地 | 字高岡  |    |    |    |    |    |    |    |     |               | 石狩 石狩高岡95から |
| 17  | 材木沢    | 遺物包含地 | 字高岡  |    |    |    |    | ●  | ●  |    |     | 縄文末～続縄文土器、石斧4 | 低湿地         |
| 18  | 当別高岡12 | 遺物包含地 | 字高岡  |    |    |    |    |    |    |    |     | 石鏃            | 北電石狩開閉所工事   |

※1973年の北海道教育委員会調査の遺跡カード、町教育委員会の遺跡一覧表による

図1 町内の遺跡



※電子地形図50000（国土地理院）より作成。No.は表1に対応

北海道教育委員会は、昭和40年代から50年代にかけて、全道の遺跡所在を確認するために一般分布調査を実施しており、当別町については1973（昭和48）年に調査を行い、11カ所の遺跡を確認して登載している。

その後、石狩市で石狩当別として登載していた、当別町との境界付近の6遺跡が当別町内に所在することがわかり、当別町の登載遺跡に組み込まれた〔No.11～16〕。また、1980（昭和55）年に西町で土器と石斧<sup>せきふ</sup>4点がまとまって発見され、材木沢遺跡〔No.17〕として新たに登載された。このほか、町内で大規模な開発行為が行われる際に協議が行われて、遺跡の所在調査・範囲確認調査が実施されており、1984（昭和59）年に当別高岡12遺跡〔No.18〕が追加されている。

### 遺跡調査の歴史

『當別村史』、『当別町史』、各部落史には、入植時に竪穴の凹みや遺物を見つけたなどの記録が残されている。また、昭和の戦後期には、札幌西高等学校郷土研究部（以下札幌西高）による踏査<sup>\*1</sup>、石狩町史編さんのために北海道教育大学の河野本道氏をはじめとする踏査などが行われている。その中で札幌西高による伊達山周辺の遺跡踏査が1961（昭和36）年から始まり、1964（昭和39）・1965（昭和40）年に伊達山1遺跡〔No.1〕の発掘調査が実施されている。

一般分布調査では当別高校や各地の小学校に出土遺物が保管されていた記録が残るが、廃校となった学校も多く、ほとんどその行方がわかっていない。今回確認できたのは、当別町図書館の郷土資料展示品を含めた旧開拓郷土館所蔵品と、北海道博物館所蔵の札幌西高等学校奥野清介先生寄贈資料（北海道開拓記念館 1999）である。これらの資料と郷土誌の記載、札幌西高の調査記録などを手がかりにして、当別町の遺跡についてまとめた。

\*1 近田 1952、森田 1958ほか（引用・参考文献については、p113～p114を参照。以下、氏名・年については同様）



写真1 伊達山の風景

## 第2節 各地区の遺跡

### (1) 伊達山丘陵地区

当別町東北部には、当別川と石狩川本流右岸に挟まれるように伸びる当別丘陵がある。その丘陵部南端は伊達山（標高126.3m）と呼ばれており、その周辺に遺跡があることが古くから地元の人々によって知られていた。それが、後に伊達山1遺跡の発掘調査が行われるきっかけとなっている。伊達山斜面には3カ所に遺物の散布地があり、北方の標高の高い地点に伊達山1遺跡〔No.1〕、南方の市街地に近い段丘に伊達山2遺跡〔No.2〕、当別川へと下る斜面に茂平沢遺跡〔No.4〕が立地している。

#### 伊達山1遺跡〔No.1〕

伊達山丘陵地帯の南西斜面部、標高70m付近に位置する。地元の人々からの土器などが拾えるとの情報を元に、1961（昭和36）年から札幌西高による調査が開始された。その後12回の表面調査と1964（昭和39）・1965（昭和40）年の2年にわたる発掘調査が行われ、その成果は1970（昭和45）年の報告書などにまとめられている\*2。

\*2 岩崎ほか1970

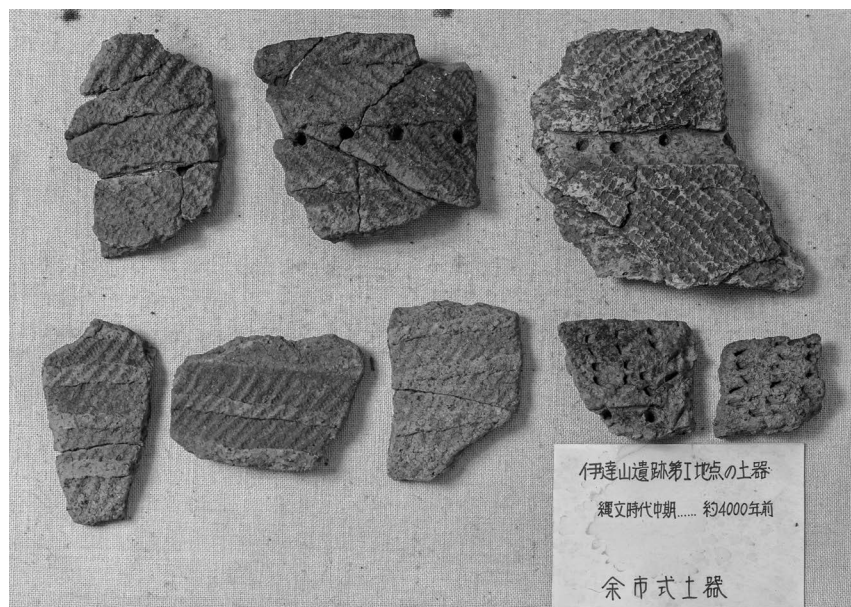


写真2 伊達山遺跡1から出土した余市式土器。貼り付けの帯が数段つけられ、また円形の刺突紋がつけられている（当別町教育委員会所蔵）



写真3 伊達山1遺跡から出土した石斧片（当別町教育委員会所蔵）

発掘調査は159㎡の範囲で行われ、平地建物跡1軒が検出され、縄文時代中期末から後期初頭（4000年前ころ）の余市式土器（伊達山式土器、前頁写真2）と各種石器が数多く出土している。石器には石槍、石鏃<sup>せきぞく</sup>、スクレイパー類、磨製石斧<sup>といし</sup>、砥石、石核、たたき石など、縄文時代に一般的に見られる器種が含まれている。報告書では遺跡の性格について、石器の組み合わせや立地条件から、狩猟を生業とした季節的な遺跡と推定している。

石器の中で特徴的なものとして、黒曜石製の小型石核と石斧類がある。石核はくさび形の小型のもので、そこから剥離された破片が出土していることから、遺跡内で石器を作る作業が行われたものと推定される。石器類の素材となった黒曜石は、赤井川産と推定されるものが多く見られる。小型の黒曜石製石核は、礼文町や北見市などの北筒式土器<sup>\*3</sup>を出土する遺跡などからも出土していることが指摘されている。

また、石斧類の出土数が多いことも特色となっており（写真3）、木の伐採、球根類の採集などが行われていた可能性がある。また、石斧の破片が見つまっていること、たたき石（凹み石）や砥石が多いことから、破損した石斧を凹み石で打ち欠き、砥石で形態を整え、刃を再生したことが推測できる。石狩川中流域には、石斧の加工を行った痕跡が残る遺

\*3 北海道円筒式土器の略で、中期後半に主として道東や道北に分布した、若干の繊維を含んだ円筒形の土器

跡が多く、深川から旭川にかけての片岩、夕張山地の緑色片岩、平取町のアオトラ石など石斧原産地があり、原石や半加工品などの流通が考えられている\*4。

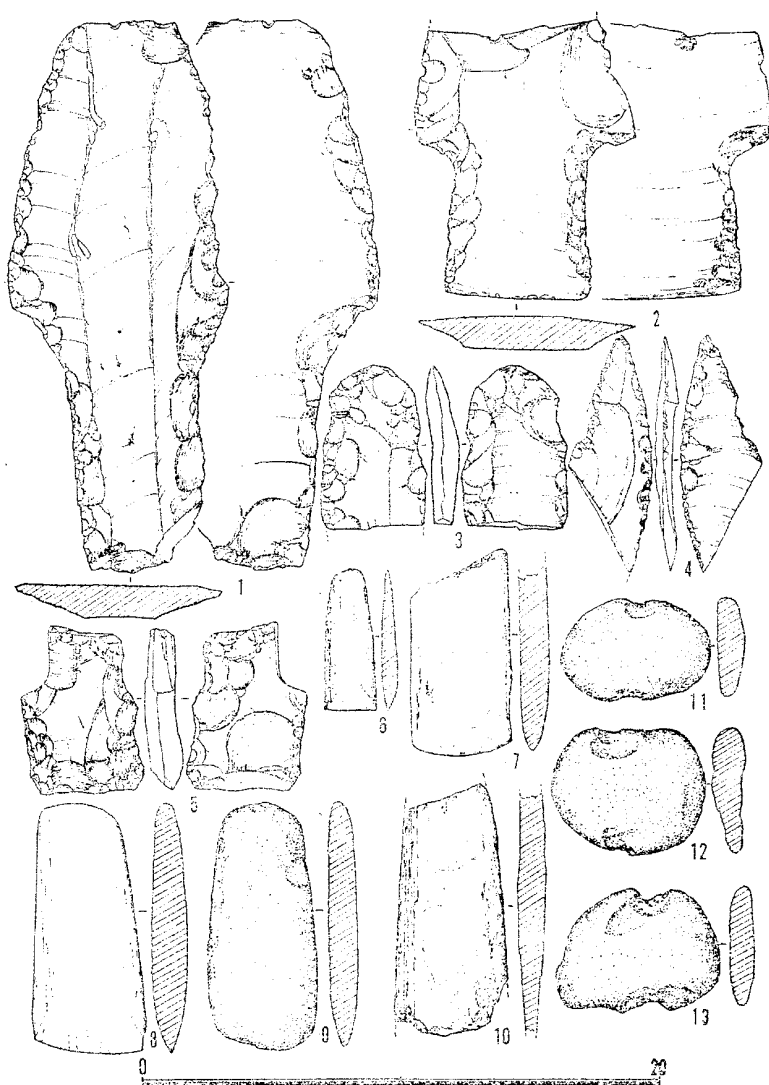
\*4 野中 1990、佐藤 2016、森岡 2021

### 伊達山2遺跡〔No.2〕

伊達山丘陵地帯南端部、標高30～35mの河岸段丘上に立地する。札幌西高の伊達山遺跡踏査の際に採集され、その一部が報告されている\*5。

\*5 岩崎 1965

図2 伊達山2遺跡出土の石器類



※岩崎1965から引用



写真4 伊達山2遺跡で採集された石錘（当別町教育委員会所蔵）

資料は旧開拓郷土館所蔵品として保管されており、大型・小型の黒曜石製両面加工石器、磨製石斧、礫石錘<sup>れきせきすい</sup>、たたき石、すり石などが含まれている（前頁図2）。礫石錘は63点あり、53個が短軸打ち欠きで（写真4）、計測可能資料の平均は長径6.7cm、短径4.9cm、重さ35 gである。

土器が見つからず、石器のみ表面採集されているので時期が明確でないが、擦切り磨製石斧や短軸打ち欠き石錘の形態から見て、縄文早期後半の石器群とみなせる。

#### 茂平沢遺跡〔No.4〕

伊達山から当別川へ下る斜面の標高30m付近に位置する。現在ゴルフ場になっており、詳細は不明である。遺跡カードには当別高校に擦文土器1点と記されているが、確認できていない。

茂平沢開基百年記念誌編集委員会が1990（平成2）年に刊行した『百年の星霜一茂平沢開拓記念誌』には、「伊達山3382-287番地（加来衛所有地）百点分の石器、矢じり等が出土している」とあり、これに相当すると思われる。同書には、「八木沼沢東部斜面、上当別十一線四十五の畑（新淵直右衛門開拓、現・高橋輝高所有地）の土盛りの中から多量

の土器類の破片が出土した」との記載もある。

また、1988（昭和63）年のゴルフ場建設に伴って行われた調査で、当別川流域に遺跡が1カ所発見されている。

このほか、旧開拓郷土館所蔵品には、金沢出土の記載がある縄文時代後期初頭の土器が1個体残されている（写真5）。出土地点は明確でない。石狩丘陵の東縁や当別川流域には段丘の発達が見られ、他にも遺跡が所在していた可能性がある。



写真5 金沢地区から出土した土器の破片(当別町教育委員会所蔵)

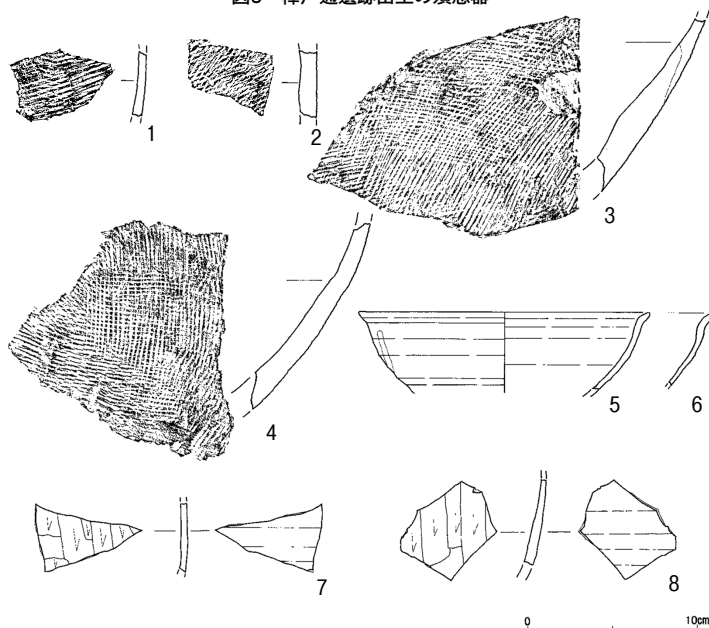
## (2) 青山地区の遺跡

伊達山、茂平沢地区から当別川を更に遡った地区である。登載された遺跡はないが、北海道博物館に須恵器<sup>\*6</sup>片が収蔵されている<sup>\*7</sup>。この須恵器は1955（昭和30）年ころに札幌西高により表面採集されたもので、16点現存する。須恵器<sup>つき</sup>坏はろくろ調整の椀型で、口縁部はやや外反する。灰白色を呈し、胎土は褐色で、外面にはいわゆる「緋たすき」（重ね焼きの<sup>わら</sup>藁の痕）が残されている（図3-5）。同地点から採集されている壺の胴

\*6 須恵器について、詳しくはp109を参照

\*7 鈴木 2003

図3 樺戸通遺跡出土の須恵器



※鈴木 2003から引用一部改変（北海道博物館所蔵）

部片（前頁図3の6・7）とともに、青森県五所川原窯跡群の9世紀後半から10世紀ころの製品と推定されている。

### （3）市街地地区

当別川は、河川改修によって直線化されているが、古い地図では大きく蛇行しながら流れており、この川沿いにいくつかの遺跡が分布している（P97図4）。

#### 樺戸通遺跡〔No.5〕

当別川左岸に位置しており、かつては大きな蛇行部にあたっていた。現在では旧河道脇の元当別中学校敷地周辺となっている。札幌西高によって、1952（昭和27）年6月6日に荒田氏の土地で発掘調査が行われ、その成果が報告されている<sup>\*8</sup>。それによれば、氾濫<sup>はんらん</sup>によって何層にも積み重なった粘土層中または下層から、擦文土器、土師器<sup>はじき</sup><sup>\*9</sup>、須恵器、土玉が出土している。また、研究者は当別高校に収蔵されていた荒田氏採集の擦文土器についても報告されている<sup>\*10</sup>。

樺戸通遺跡の資料は北海道博物館に所蔵されており、須恵器は青森県五所川原窯跡群の製品で、年代は10世紀と推定されている<sup>\*11</sup>（前頁図3-1～4）。擦文土器片も1点含まれている。

#### 当別神社裏遺跡〔No.3〕

当別川右岸の大きな蛇行部に挟まれた微高地に立地する。河川改修による直線化のため蛇行部の先端が削平されているが、神社境内である主体部は保存されていると考えられる。1977（昭和52）年に都市計画公園建設が行われたため、神社周辺以外は様相を変えている。当別高校に石斧が2点所蔵されていた記録がある。

#### 材木沢遺跡〔No.17〕

市街地西町の住宅地となっており、旧地形は明確でない。当別川支流のパンケチュウベシナイ川（P97図4のパンケチペシュナイ）または材木沢川（P97図4のトマムペオマナイ）沿いの、自然堤防に立地する可能性がある。土器が1個体と石斧が4点出土しており、縄文晩期末～続縄文初頭とされている。旧開拓郷土館所蔵の石斧4点（次頁写真6）はいずれ

\*8 近田 1952

\*9 古墳時代から平安時代にかけて本州で使用された素焼きの土器。ほとんど文様がな

\*10 岩崎 1965

\*11 鈴木 2003

も完形品で、<sup>たた</sup>敲いた跡を残す、一側縁に幅広い平坦面を持つなど晩期末頃の特徴が見られる。このような石斧は、北海道から東北北部へ流通した可能性が指摘されている<sup>\*12</sup>。

このほか、旧開拓郷土館所蔵資料に須恵器長頸壺が1点ある（写真7）。「パンケチペシナイ川左岸 昭和40年8月 堀内芳夫氏発見」との記載がある。頸部と胴部とのつなぎ部分には太めの貼付帯めぐり、肩部には窯印が見られる（写真8）。また、胴部には赤い発色が見られ、胎土は褐色系統である。青森県五所川原窯跡群の製品で、年代は9世紀後半から10世紀と考えられる。口縁部が意図的に打ち欠かれており、胴部にも孔が<sup>あ</sup>穿けられている。



写真6 材木沢遺跡から出土した石斧（当別町教育委員会所蔵）

\*12 佐藤 2015



写真7 パンケチュウペシナイ川左岸から出土した須恵器（当別町教育委員会所蔵）



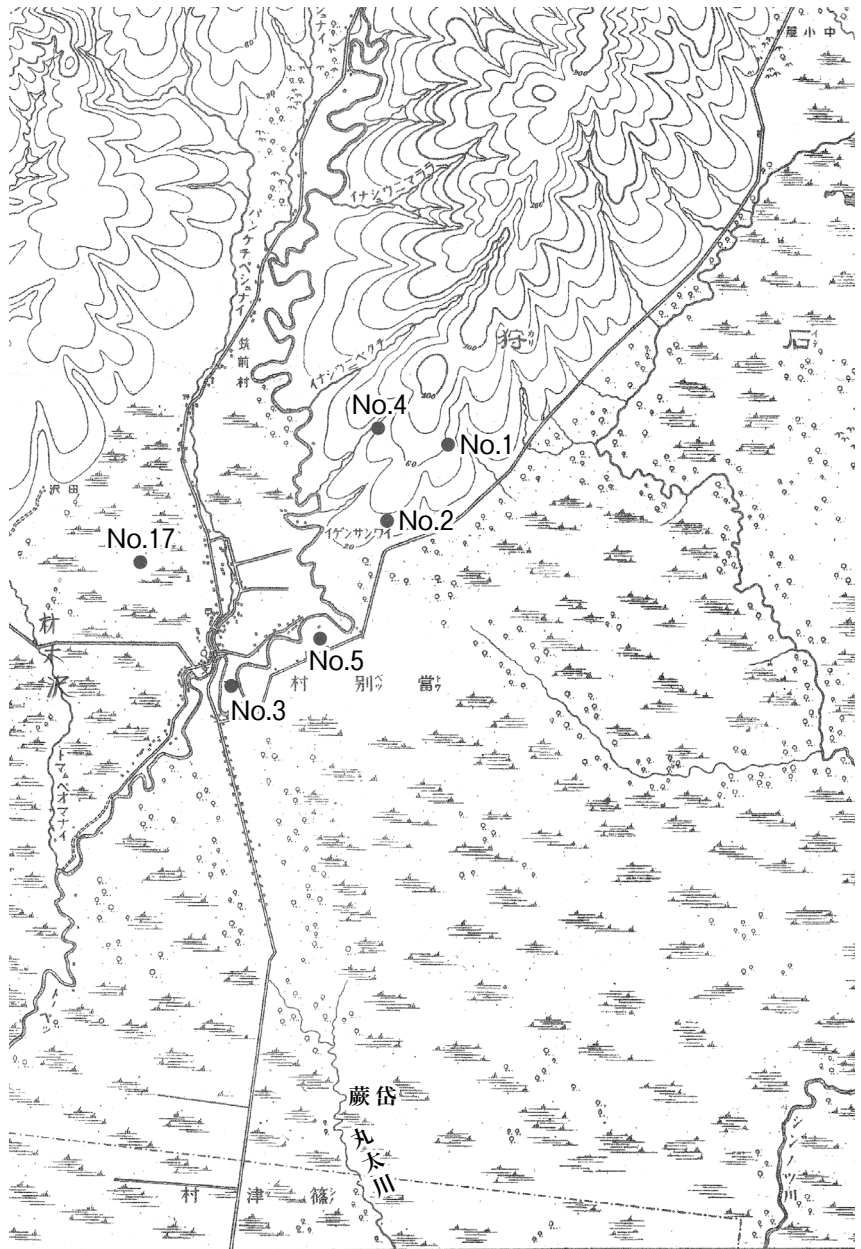
写真8 写真7の須恵器に刻印された窯印

#### （4）蕨岱地区

『當別村史』の「遺跡・遺物」の項目には、樺戸通から対雁墓地及び

蕨岱小学校付近を経て、江別市大字篠津村に至る廃川（旧当別川）一帯の高燥地に凹みが点在していたとの記載がある。それによると、平面形は円形で、直径2～3間、当別橋付近（当時）のものが最も大きく10間に達し、当時見ることができたのは十数個に過ぎなかったが、数百にのぼるだろうと推測している。また、蕨岱の西の丸太川沿いの土地から土

図4 市街地から蕨岱の旧地形



※陸地測量部明治29年作成5万分の1図に加筆

器類が出土したとの記載もある。ほかに剣が出土との記録があるので、浦臼町や深川市で刀剣類が数多く見つかったことからみて、擦文文化期からアイヌ文化期の刀剣類の可能性がある。

『当別町史』では、丸太川について、「昔は当別川の本流か支流であったように思われる。今の川南第一揚水機場付近から南走し、東裏墓地、蕨岱小学校付近経由、江別市篠津部落で篠津川に連なる旧河川の形跡」との説明がある。

市街地から蕨岱周辺にかけての地形がわかる陸地測量部作成（1896年）の地図に、周知の遺跡を記入した（前頁図4）。蛇行する当別川の状態と丸太川の流れがわかる。現在は広い範囲で水田造成が行われており、このような凹みの存在は明らかではないものの、市街地の樺戸通遺跡〔No.5〕や当別神社裏遺跡〔No.3〕から蕨岱まで連続する凹みは、擦文文化期の竪穴住居跡の可能性が強い。このような擦文文化期の竪穴群は石狩低地帯各所に見られ、札幌市にもこのような竪穴群が存在したことが知られている。

#### （5）高岡地区の遺跡

当別高岡地区は、南北に延びる標高100mほどの丘陵頂部から、日本海に向かってゆるやかな斜面が広がっており、その斜面を幾筋かの川が流れ下っている。川の水を利用して溜め池が数多く作られており、その周囲の段丘部一面に畑が造成されている。

遺跡はこのような川の湧水部や河岸段丘に見られ、隣接する石狩高岡地区にかけて、遺跡所在密度の高い地区となっている。特に石狩市との境界となっている聚富川左岸の段丘には、当別高岡10遺跡〔No.15〕・同8遺跡〔No.13〕・同11遺跡〔No.16〕・同9遺跡〔No.14〕・同6遺跡〔No.11〕・同5遺跡〔No.10〕・同7遺跡〔No.12〕・同1遺跡〔No.6〕の八つの遺跡が連続している。

このうち、当別高岡1遺跡〔No.6〕は標高22m付近と最も高い位置にあり、近くに湧水がある。縄文早期の土器が表面採集されているとの記録がある。そのほかの遺跡は、聚富川左岸段丘上に連続して並んでいるが、各遺跡の詳細は不明である。

旧高岡小学校や高岡神社のある地区には、当別高岡2遺跡〔No.7〕・同4遺跡〔No.9〕がある。ともに小河川に挟まれた、標高40mほどの丘陵

上に位置する。当別高岡2遺跡では石錘、当別高岡4遺跡では石斧が表面採集されている。当別高岡3遺跡〔No.8〕は高岡4遺跡付近の小河川を遡った、標高80mと高い地点に位置しており、近くに湧水がある。

このほか、北電西当別開閉所建設時に石鏟が1点表面採集されている(当別高岡12遺跡〔No.18〕)。標高60～70mの丘陵地に立地する。

旧開拓郷土館所蔵資料に、どこかの地点に相当するか不明であるが、当別高岡P地点と注記された資料がある。石錘7点、半月形すり石1点、石



写真9 高岡P地点から出土した石錘(当別町教育委員会蔵)

斧3点、つまみ付きナイフ2点と黒曜石と頁岩の剥片がある。石錘は安山岩製扁平<sup>はくへん</sup>礫<sup>れき</sup>の長軸を打ち欠いたもので、7点平均の長径8.9cm、短径7.7cmと、伊達山2遺跡と比べ大型である(写真9)。海進の時期にあたる縄文前期前半ころ(7000～6000年前)と推定される。

石錘については、『当別高岡一世紀のあしあと』(高岡部落史編纂委員会1981)に「海道、白川、松井、藤山所

有地内から石錘やつまみのあるスクレーパー(皮剥ぎ用ナイフ)や石斧、石鏟などが局地的に耕地内より出土する。特に石錘は5ヶ～10ヶ位1ヶ所からかたまって採取されている」とあり、石錘の出土が多いことがわかる。また、『石狩町史(上巻)』には、隣接する石狩当別地区でも石錘が多く表面採集されていることが記されている<sup>\*13</sup>。

\*13 河野ほか 1962、  
工藤 2022

## (6) 太美地区・ビトエ地区

現在の石狩川右岸にある当別町太美地区・ビトエ地区では遺跡は確認されていない。しかし、隣接する石狩市美登位地区と現石狩川対岸の生振地区では、砂丘上に立地する遺跡が確認されている。現在の石狩川本流は新たに切り替えられているので、生振地区から砂丘が続いていた可能性があり、遺跡の存在も考えられる。

### 第3節 石狩低地帯の歴史と当別町の遺跡

#### 北海道の旧石器文化

人類が日本列島に入ってきたことが明確になるのが3万7000年前、北海道では今から3万年ほど前の遺跡が知られている。この時期は、氷河期と呼ばれる寒冷な気候となっており、両極の氷床と高山の氷河に水が蓄えられて海面が低下し、北海道はサハリンとつながって大陸から伸びる半島状になっていた。この陸橋を通してマンモスやヘラジカなどの大型哺乳類が入り込み、この動物群を追う形で大陸から人々が入ってきたと考えられている。

このような旧石器文化の遺跡は、当別町では見つかっていない。だが、石狩低地帯の西岸と東岸にはいくつかの遺跡が知られており（図5-1）、伊達山周辺の丘陵地帯や当別高岡地区にも存在する可能性が高い。

この時期に海面が現在より100mほど下がっていたとすれば、石狩川の河口は石狩湾の沖へ後退しており、各河川の流域にはツンドラ状の湿地が広がり、周辺の丘陵地帯は針葉樹林の森になっていたと思われる。

図5-1 旧石器時代の遺跡分布

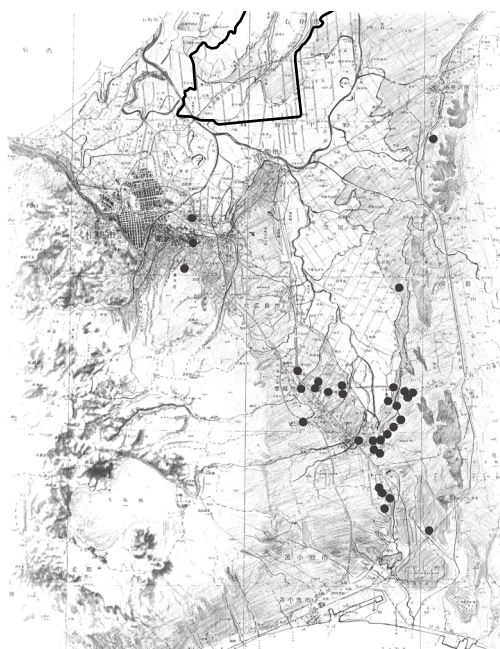


図5-2 縄文早期の遺跡分布

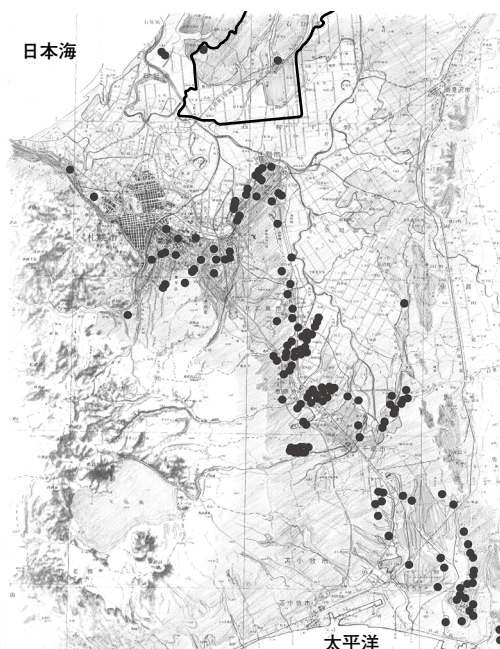


図5-3 縄文前期の遺跡分布

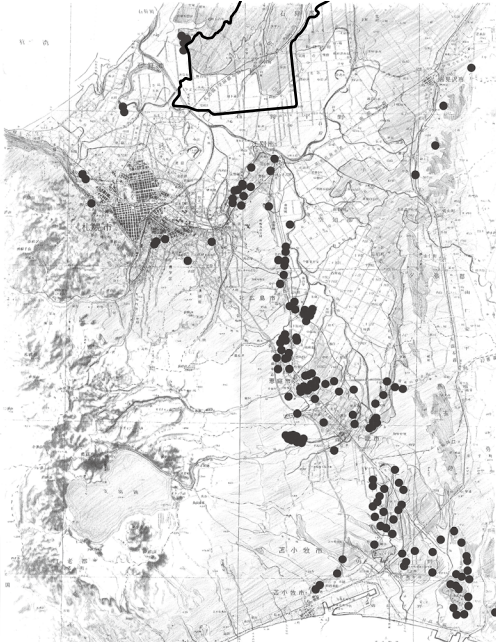


図5-4 縄文中期の遺跡分布

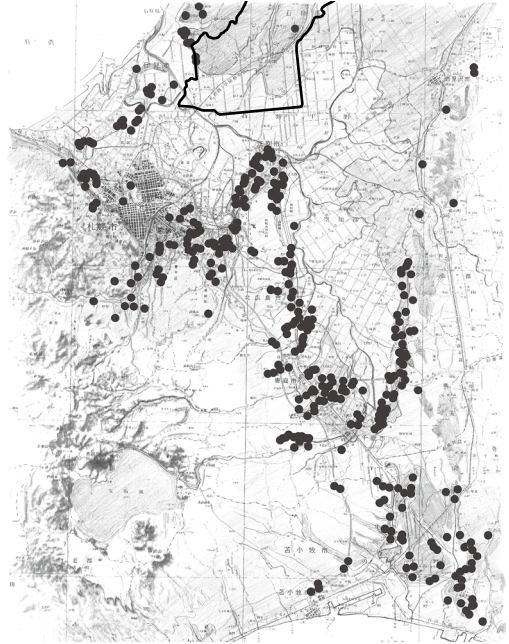


図5-5 縄文後期の遺跡分布

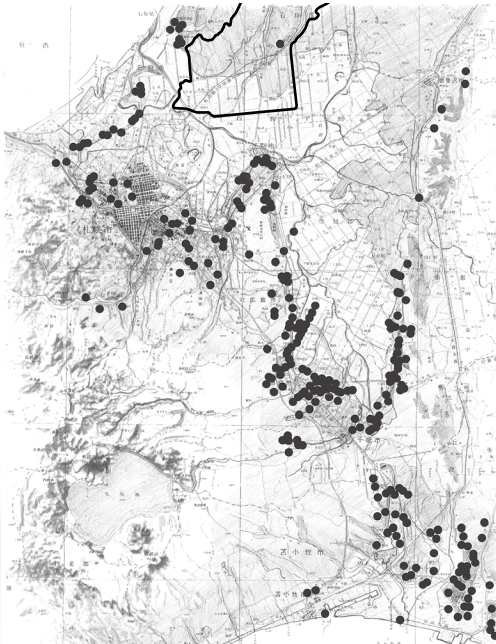


図5-6 縄文晩期の遺跡分布

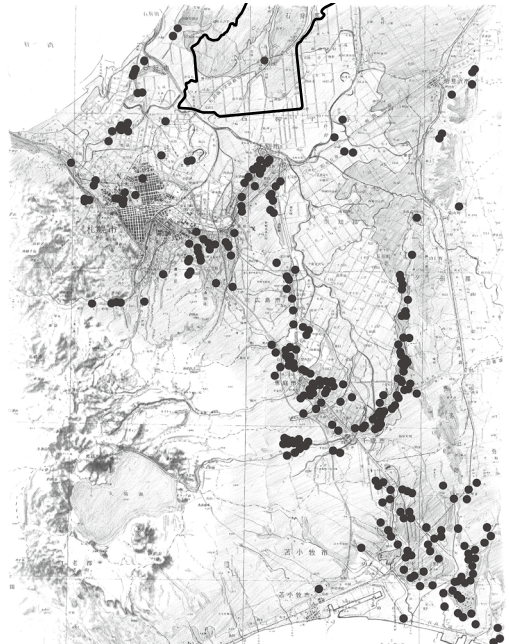


図5-7 続縄文期の遺跡分布

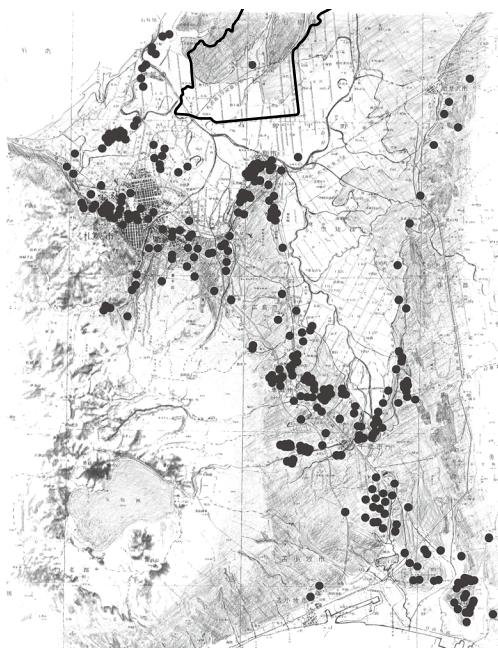
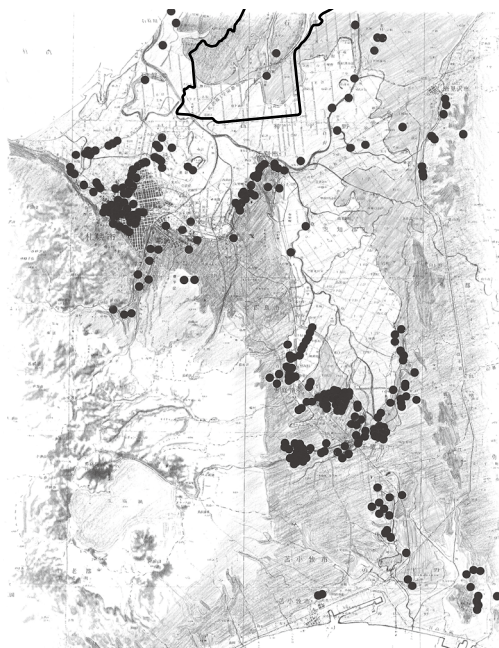


図5-8 擦文期の遺跡分布



## 縄文文化の始まり

今から1万5000年ほど前になると急激に地球規模の温暖化が起こり、周辺環境が変化し始めた。温暖化によって両極の水床や陸上の氷河が融けて海水面が上昇し、宗谷海峡が開いてサハリンと離れ、津軽海峡は広くなった。それまでの河川沿いに海が進出し、各地に大きな入江が形成された。

温暖化とともに針葉樹林地帯が北へ後退し、そこに落葉広葉樹林地帯が北上して北海道南西部まで広がった。落葉広葉樹林の森には、秋にドングリ・クルミ・ブナなどの堅果類が実り、春には山菜が芽吹くようになった。また、マンモスなどの大型哺乳類に代わって、森には多くの中小型の哺乳類が生息し始めた。

森を潤した川は海に豊富な栄養分を運び、入江に魚介類、海獣類などが生息する豊かな生態系が生まれた。そして、川をサケ・マスが遡り、それを森の生物たちが利用する生命の連鎖が創り上げられた。

このような生態系を広く活用した人々の営みが縄文文化といえる。

### 定住生活の始まり

2021（令和3）年に世界文化遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」の普遍的価値には、農耕に移行せずに、狩猟・漁労・採集により自然の多様性を利用し、それを大きく改変することなく定住生活を達成し、1万年にわたる安定した生活を維持し続けたことが大きく評価されている。

定住を行うためには、温暖化によって育まれた海・森・川の豊かな資源を多角的に利用することと、温暖化によって冬季に雪が多く積もり、自由な行動が制限されるため、越冬対策を行うことが必要であった。

粘土をこねて形を作り、それを焼き上げた土器を使用して、ものを煮ることができるようになった。植物のあく抜き、肉を軟らかくして食べる、魚介類を煮干しにすることなどが可能になって食の幅が広がり、それを保存食として利用することができた。土器はいわば現代の「鍋」であり、その重要性から、1万5000年前ころの土器の発生をもって、縄文時代の始まりとしている。

縄文文化草創期（1万5000～1万1000年前）の遺跡は、まだ道内でも数カ所しか見つかっていない。早期（1万1000～7000年前）になって温暖な気候が安定して定住化が進み、多くの遺跡が残されるようになった（P100図5-2）。当別町伊達山2遺跡〔No.2〕が縄文早期後半期と推定され、擦り切り石斧とともに、漁網の錘として使用されたと考えられている石錘が見つかっていることから、すでに現在の市街地付近には森が広がり、海水面が上昇して海が広がってきていたと想定できる。

### 古石狩湾の形成と遺跡 ―海岸部になっていた当別周辺―

7000～6000年前の縄文海進により、石狩湾が現在よりかなり奥まで進入していたことが、ボーリングデータを基にして推定されている<sup>\*14</sup>。海水面が現在より4～5mほど高くなり、現在の石狩・小樽・札幌・当別・江別・北広島・恵庭・長沼にまたがる範囲に、汽水湖（古石狩湾）が存在した（次頁図6-1、P105図6-2）。当別町市街地の東北段丘あたりから獅子内付近、当別高岡地区や石狩高岡地区の段丘縁が汀線になっていた。

古石狩湾の周辺には、縄文時代前期（7000～5000年前）の遺跡が広がっている（P101図5-3）。前半期の遺跡は、分厚い尖底土器、漁網用と

\*14 嵯峨山ほか  
2018、嵯峨山 2022

推定される多量の石錘の出土に特色付けられる。石錘の分布は現在の海岸線から遠く離れたところにまで広がっており、当時の海の広がりが見定できる。

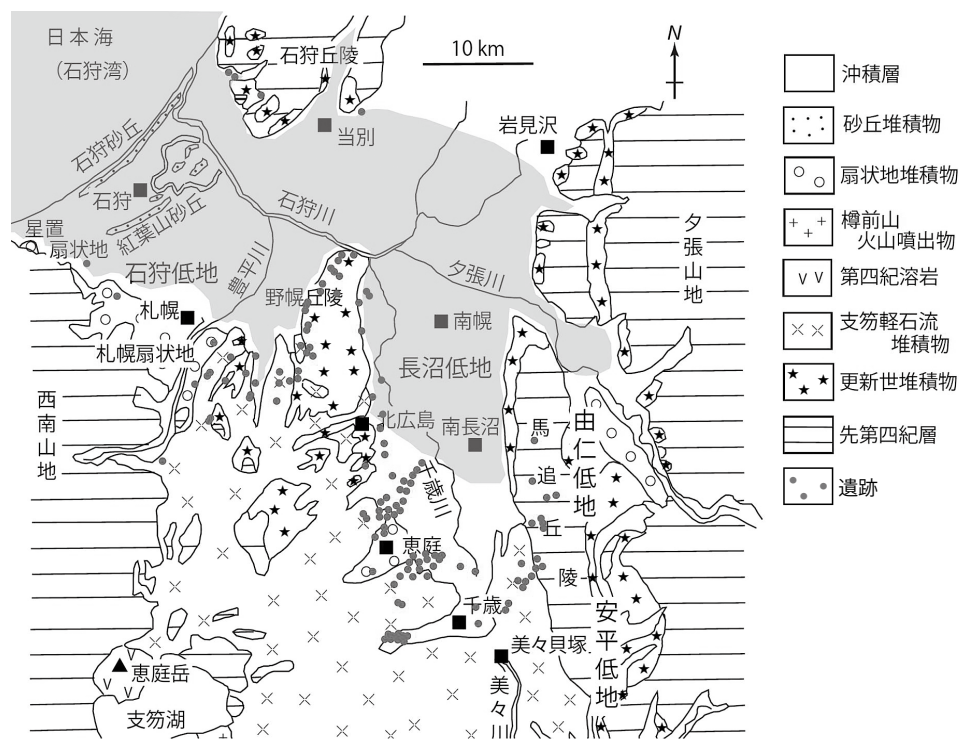
旧開拓郷土館所蔵品、北海道博物館や石狩市の収蔵資料を見ると、石狩市から当別町にかけての高岡地区の遺跡からも、前期前半の土器や数多くの石錘が表面採集されている<sup>\*15</sup>。町内では当別高岡2遺跡〔No.7〕、当別高岡P遺跡から石錘が出土している。古石狩湾に依存した生活を営む人々が残したものと推測される。

\* 15 工藤 2022

## 砂州・砂丘の形成と潟

現在の石狩市紅葉山砂丘上に立地する花畔E遺跡と上花畔1遺跡では、縄文時代前期末（5000年前ころ）の土器が出土しており（P101図5-3）、このころまでに古石狩湾の海岸部に砂丘列ができはじめていたことを示している。中期中ごろ（4500年前ころ）になると、紅葉山砂丘や生振砂丘上に立地する遺跡が増え（P101図5-4）、後期（4000年～3000年前）

図6-1 縄文時代早期から前期（7000～6000年前）の遺跡群と地質図



※嵯峨山 2022から引用

にも引き継がれる（P101図5-5）。また、晩期ころからは、現河口部付近に三角州か砂丘列が形成されているようで、そこにも遺跡が見られる（P101図5-6）。

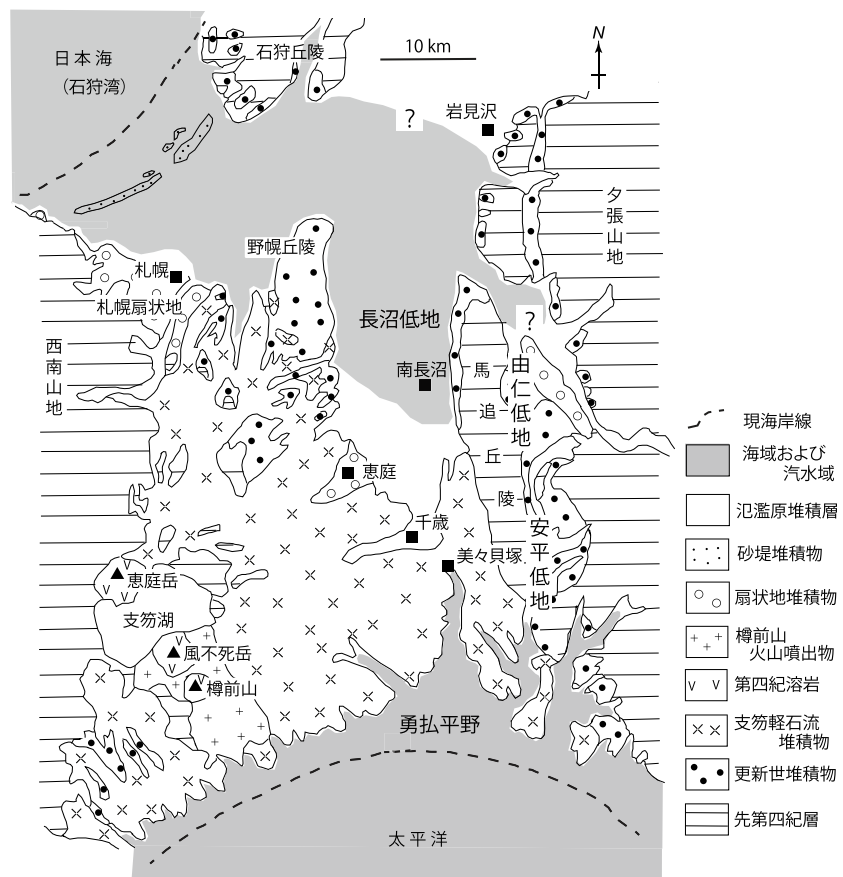
砂丘上に遺跡が立地し始める理由の一つとして、石狩市紅葉山49号遺跡から見つかった、縄文中期中ごろの鮭の捕獲施設が参考になる。紅葉山49号遺跡では、川の中に杭を打ち込んで杭列を作り、これに木の枝をヤマブドウのツルで組んで作ったすだれ状の柵を取り付け、遡ろうとする鮭の行く先をさえぎり、そこで捕獲したと考えられている（石狩市教育委員会 2005）。

このような施設は、石狩市紅葉山52号遺跡・札幌市K483遺跡（縄文中期・中世相当期）、江別市江別太遺跡（続縄文文化期）、札幌市K39遺跡（擦文文化期）でも検出されており、アイヌ文化のウライ<sup>\*16</sup>へと引き継がれている<sup>\*17</sup>。

\*16 川で魚を捕獲するための築（やな）のこと。川に数本の杭を打ち、小枝などで杭の間にふさぎ、魚を誘導して釜（うけ）で捕らえる

\*17 工藤 2022

図6-2 約6000年前の海域や汽水域の広がり



※嵯峨山ほか 2022から引用

また、中期中ごろからは、現在の札幌市中心部あたりの扇状地に遺跡が立地するようになり、後期以降にも継続していく。このような遺跡の立地は、鮭が産卵する場所と関係しており、砂丘部と合わせて鮭利用が定着していくと考えられる。

### 古石狩湾の湿地化と自然堤防の形成

縄文晩期ころ（3000年前ころ）から、かつて湾であった範囲内に遺跡が見られるようになり、続縄文文化期へと続いていく（P101図5-6・P102図5-7）。縄文中期後半からの寒冷化（4000年前ころ）に伴って海水面が低下しており、古石狩湾が徐々に湿地化した。そこに川が流れ、堆積物により自然堤防が形成され、その上に人々の生活が営まれたと考えられる。

材木沢遺跡〔No.17〕から縄文晩期ころの石斧がまとまって発見されており、材木川かパンケチュウベシナイ川の自然堤防上に立地した遺跡と考えられる。同じような時期の遺跡として、江別市対雁2遺跡や札幌市の「サッポロさとらんど」敷地内にあるH508遺跡があり、サケ・ウグイ・チョウザメなど石狩川で捕れた魚の骨などが見つまっている<sup>\*18</sup>。

\*18 鈴木・仙庭  
2021

これらの遺跡には、多くの火を燃やした跡（焼土）があるが、竪穴建物が見つかることは少なく、特に続縄文文化期中ごろ以降は竪穴建物がほとんど見つかっていない。丘陵地帯やその縁辺部で生活していた生活様式から変化している可能性が大きい。

続縄文文化とは、本州に水田稲作農耕が定着し、青銅器や鉄器の使用が開始され、弥生時代へと変遷していく中で、北海道ではそれまでの狩猟・漁労・採集に頼る生活が続き、縄文が施文された土器が継続して使われていることから名付けられている。弥生海退といわれるような寒冷期があり、石狩低地帯においてもその影響によって、漁労に重きを置く生活形態になっていったと考えられる。定住生活から、移動を繰り返す生活へと変化した可能性が指摘されているが、まだ当時の様相は明確になっていない<sup>\*19</sup>。

\*19 石井 1998、  
高瀬 2014

### 擦文文化の竪穴群

縄文晩期以降の自然堤防上での人々の生活の活動の跡がはっきりしてくるのが、擦文文化期である。

擦文文化は、本州に古代国家が形成され、北海道がその影響を強く受けて成立したと考えられる。本州の刀子（ナイフ）・鉄鏃（ヤジリ）・鉄斧、鉄鎌などの鉄器が持ち込まれ、それまで使われていた石器がほとんど見られなくなる。一方で、続縄文文化期後半ではほとんど見つかっていなかった竪穴建物が突然出現する。それも、四角い平面形で、壁の一角にカマドを取り付けた、本州系統の住居である。農耕作物栽培も持ち込まれたようで、アワ・ヒエ・キビなどの種子が炭化した状態で、カマド付近から検出される例がある。また、東北北部の影響を受けた、「北海道式古墳」と呼ばれる盛土を持つ形態の墓が江別や恵庭に出現する。

もう一つの大きな変化は、1万年にわたって土器に付けられてきた縄による文様が消滅したことである。土器には整形の為に残された刷毛目や、ヘラなどによって描かれた線による文様は残るが、本州の土師器の強い影響を受けた無文に近い土器となっている。

このように、本州の古代国家の影響を強く受けて成立した擦文文化は、前半期には道南部と石狩低地帯周辺にその範囲が限られているが、後半期には全道へと拡大していく。それを示すのが、全道に残された方形の平面形の竪穴建物跡の凹みである（次頁図7）。

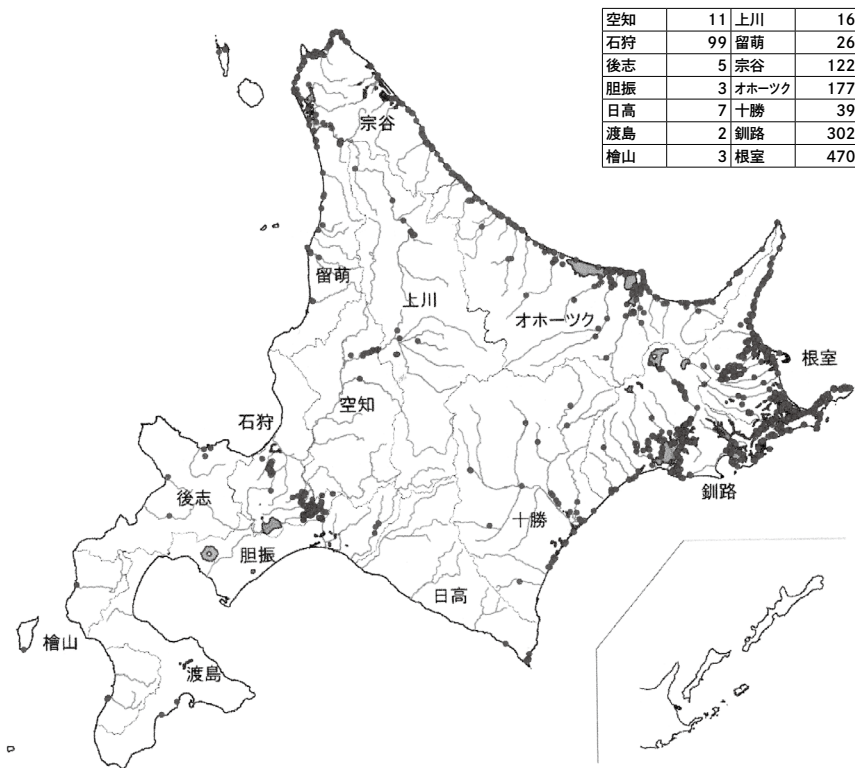
前項に記したように、『當別村史』には本町から対雁墓地、さらに蕨岱小学校の周辺にかけて、数十の凹みが見られたとの記述がある。本町の樺戸通遺跡から擦文土器や須恵器が出土しており、この話を裏付けることができる。

石狩川左岸の札幌市域には、中央区植物園、北区北大付近の扇状地先端部から、東区の自然堤防上にかけて多くの擦文文化期の竪穴が残されていたことが明治の記録に記されており<sup>\*20</sup>、発掘調査によってその存在が確認されてきている。それと同様に、石狩川右岸では新篠津で擦文文化期の竪穴住居跡が確認されており、当別地域までの支流の自然堤防上に多くの竪穴群があった可能性が強い。

このような埋まりきらない竪穴群は全道各地に見られ、北海道教育委員会によってその分布が記録されるとともに（次頁図7）、北海道の特色ある遺跡としての活用が図られている。当別地区についても、竪穴跡の確認調査が行われ、分布図に加えられることが期待される。

\*20 羽賀 1975

図7 「堅穴」が確認された遺跡の分布



※北海道教育委員会2018『北海道の堅穴群の概要』

### 擦文文化と本州、オホーツク文化との関係

擦文文化期には、日本海を経由した本州との結びつきが強まったと考えられる。この時期に石器がなくなり、鉄器が使用されるようになったこと、また道南部から道央部にかけての遺跡から、鉄器を再加工するための鍛冶遺構が見つかったことは、常に安定して本州から鉄器が供給されていることを意味している。鉄器のほかにも、土師器や須恵器など様々な品物が本州からもたらされ、石狩低地帯奥の江別市・恵庭市・千歳市などからも本州系の遺物が数多く見つまっている。

恵庭市・江別市・札幌市に北海道式古墳が造営されたところには、恵庭市から当時の貨幣である和同開珎（708年初鑄）と隆平永宝（796年初鑄）、千歳市から富壽神宝（818年初鑄）、オホーツク海沿岸の斜里町から神功開宝（765年初鑄）が出土している。このような皇朝十二銭<sup>\*21</sup>の

\*21 和同開珎以降、奈良時代から平安時代にかけて順次発行された12種類の銅製銭貨の総称

\*22 古代の行政機関や役所を指す言葉で、特に地方の機関を指すことが多く、律令時代に重要な役割を持っていた

\*23 律令の施行細則である式の集大成。905（延喜5）年に編さんに着手し、927（延長5）年に完成した

東北での出土遺跡はほとんどが官衙遺跡<sup>かんが</sup>\*22であり、古代国家の出先機関であった秋田城との関係を示すと考えられる。

これに対して、北海道から秋田城に運ばれたモノは、『延喜式<sup>\*23</sup>』に見られる各種毛皮などが主であり、朝貢交易の形でそれに対する饗宴、鉄器類・土師器・須恵器・布などの下賜が行われたと考えられている。

道南部から道央部で擦文文化が成立したところには、大陸系のオホーツク文化がサハリンから南下して、道北部からオホーツク海沿岸にかけて広がっていた。その最南端にあたるのが奥尻島青苗砂丘遺跡で、オホーツク文化の住居跡・土器・石器・骨角器などが見つかっている。日本海側には、本拠地ともいえる利尻島と礼文島はもとより、天売島・焼尻島・留萌市・石狩市浜益岡島洞窟・小樽市忍路土場などからオホーツク文化の遺物が出土しており、日本海側を通してオホーツク文化の人々が往き来していたと考えられる（北海道立埋蔵文化財センター 2002・2003）。また、札幌市・恵庭市・千歳市からもオホーツク式土器が出土しており、一部は石狩川を遡っていた可能性もある。

オホーツク文化の人々は、大陸からの鉄器類を手に入れているものの、利器として主に石器を使用しており、身近な本州から鉄器を入手しようとしたと考えられる。それには、道北部からオホーツク海沿岸の海獣類の毛皮が重要な交換材料となったのであろう。擦文文化の人々も毛皮を手に入れるために、オホーツク文化の人と接触をはかり始めていたことが、恵庭市や千歳市の本州系の遺物とともにオホーツク式土器が出土することからうかがうことができる。斜里町から出土した神功開宝は、本州の律令国家、擦文文化、オホーツク文化の三者のつながりを象徴している。

つまり、日本海は北へのルートと道南から本州へのルートの交わる地域となっており、石狩低地帯へもそのルートから、多くの人々とモノが入り込んできていたといえよう。

### 須恵器の流通

本州と北海道の関係を示す遺物として、須恵器が注目されている。須恵器は4・5世紀に朝鮮半島から伝わった、ろくろで成形され、登り窯による還元炎焼成された、青灰色の焼き物である。古代国家権力によって国内生産されるようになった須恵器は、次第に北海道を除く各地で生産

が行われるようになった。

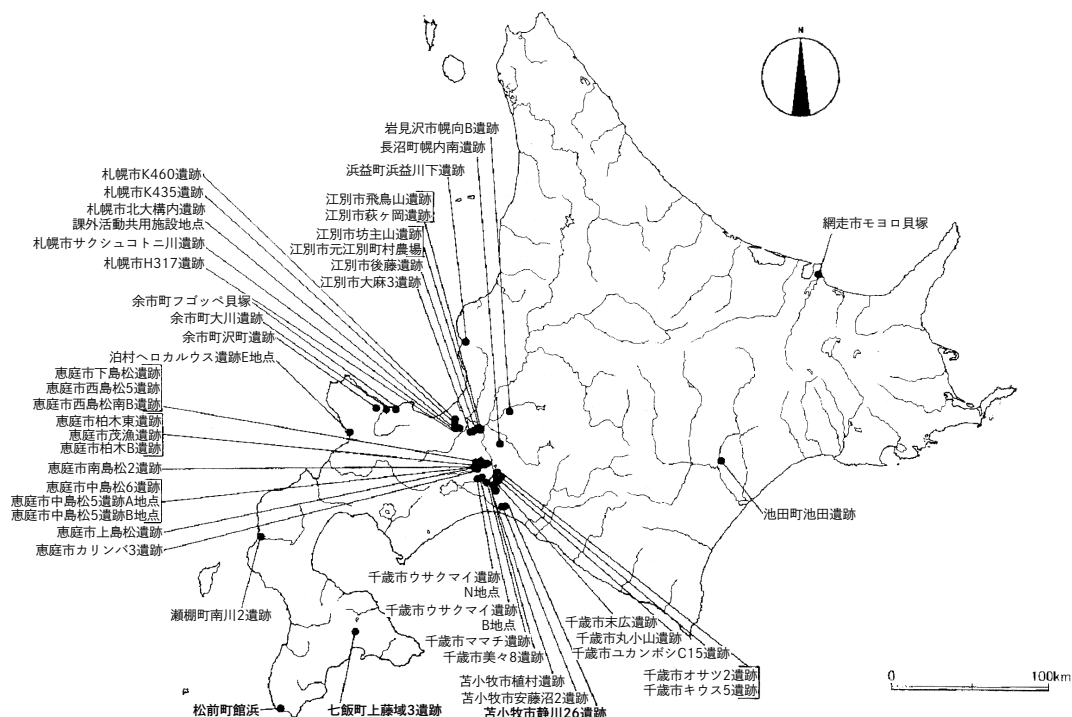
北海道からは、わずかであるが5・6世紀代の東北以南地域の須恵器が出土している。8・9世紀代になると発見例が増え、北上川流域や秋田城周辺の窯で生産された須恵器が石狩低地帯の札幌市・江別市・恵庭市・千歳市周辺から広く出土するようになる(図8-1)。器形は坏が主で、高台坏皿・椀などに限られている。秋田城での饗宴の際などに使われ、持ち帰ったモノと考えられている<sup>\*24</sup>。

\*24 鈴木 2016

当別町からは、この時期より少し後の時期の須恵器が出土している。北海道博物館には札幌西高が調査した樺戸通遺跡〔No.5〕や青山地区の資料が収蔵されており、旧開拓郷土館所蔵資料には「パンケチュウベシナイ川左岸採集」の須恵器がある。いずれも9世紀後半から10世紀代の青森県五所川原周辺の前田野目窯で焼かれた製品で、長頸壺<sup>かめ</sup>、甕、坏の器形がある。

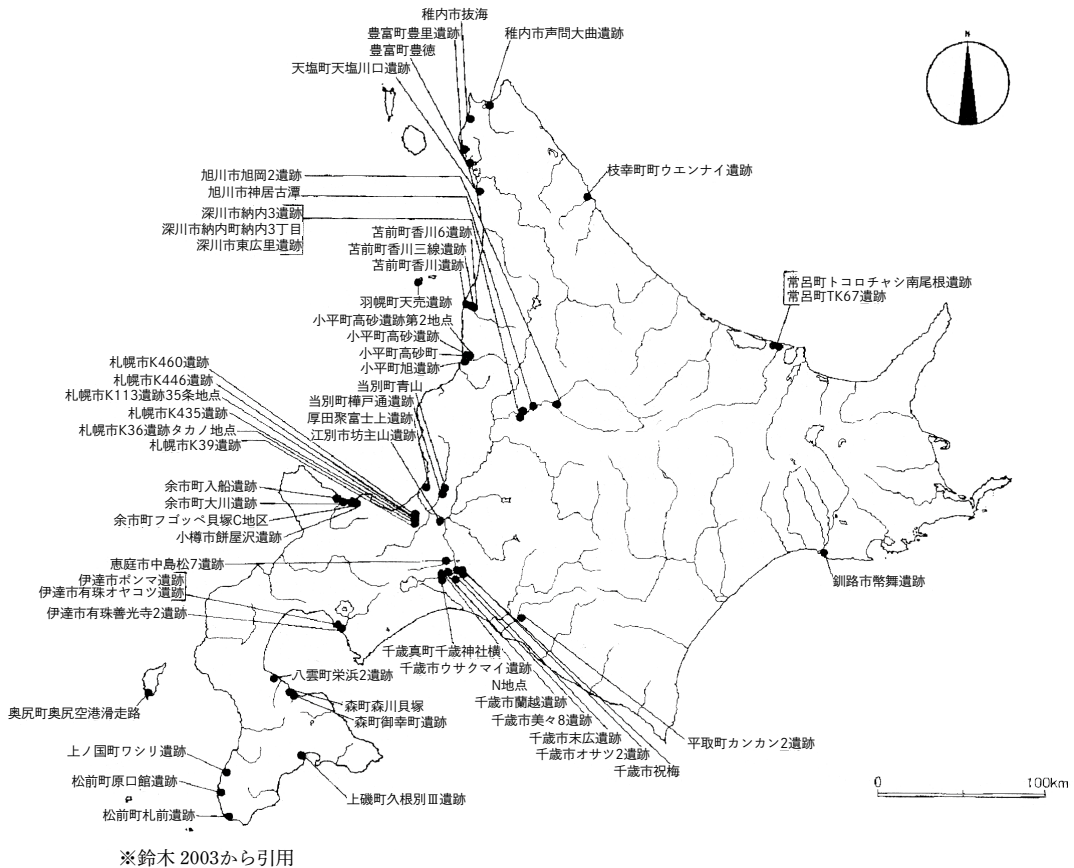
五所川原窯跡群製品の分布は、道南部から石狩低地帯にかけてだけでなく、石狩川中流域、日本海北部沿岸、オホーツク沿岸へも広がって

図8-1 須恵器の分布1 (非五所川原窯系、9世紀前半)



※鈴木 2003から引用

図8-2 須恵器の分布2（五所川原窯系、9世紀末から10世紀）



いる（図8-2）。擦文文化が北へ分布範囲を広げて行くに従って、海路によって運ばれたととらえることができよう<sup>\*25</sup>。この時期には、長頸壺、中甕の器形に限定されており、主に水や酒の容器として使用されたと考えられる。

\*25 鈴木 2016

秋田城周辺産の須恵器から、五所川原窯産の須恵器へと変化するの  
は、交易形態の変化を反映している。秋田城を中心にした蝦夷との交  
易態勢が、9世紀後半の蝦夷との戦い（元慶の乱：878年）、915（延喜  
15）年の十和田火山の噴火などから崩壊し、津軽方面の蝦夷が勢力を広  
げた。津軽平野周辺で9世紀後半から集落数増加が見られることと関係  
して、周囲に壕を巡らせた集落が出現している。このような勢力が岩木  
山麓の鉄器生産や前田野目地区における須恵器生産を担ったのであろう。

日本海を通じて東北北部の勢力と結びついた石狩低地帯の人々は、さ  
らに北へも進出していくようになった。それが前田野目窯産須恵器の分

布拡大に示されており、もう少し大きな目で見ると、擦文文化とオホーツク文化との積極的な結びつきの始まりと見ることができよう。やがて両者が融合する形で道内全域にわたる交易網が確立されるきっかけとなっている。

このように、石狩河口域は道南部の日本海沿岸を經由して本州と結びつき、一方で道北方面からサハリンへとつながる窓口でもあった。

### 「アイヌ文化期」

本州からのモノの流入は、12世紀ころから船の大型化によって促進されていった。その中でも鉄鍋の流入によって、北海道で1万年以上使用され続けられてきた土器がなくなった。また、擦文文化独特の方形の平面形で、一方にカマドを持つ竪穴住居から、囲炉裏を持つ平地住居（チセ）へと変化する。

鉄器をはじめとする生活用具の多くを本州に依存する形になり、これまでの毛皮類だけでなく、道内のサケをはじめとする水産資源が交易品として重要になった。交易品の生産と交易体制を維持するために、より強固な道内集団の結びつきが生まれてくる。この時期を、近世の文献や絵画によって知られるアイヌの伝統的文化が形成された時期として、「アイヌ文化期」と呼んでいる。

### 当別町域の果たした役割

明治期に本州から移住が行われる以前にも、当別町域には縄文文化からアイヌ文化まで多くの人々の長い歴史があった。それを示すのが遺跡であり、出土した様々な遺物が当時の様相を明らかにしてくれている。

石狩川河口域は、モノの流通面で見ると、道南部の日本海沿岸を經由して本州と結びつき、また道北方面からサハリンへとつながる窓口でもあった。さらに縄文時代から続く河川交通の面では、日本海と太平洋を結ぶ交通路としての役割も重要であった。このルートは、近世には「シコツ越え」と呼ばれた。

当別町域は、石狩川を遡上するルートと、千歳川・夕張川を遡上するルートの分岐点近くに位置する。縄文文化以来のモノの流通をたどる上で、今後、竪穴群の調査などを行うことによって、この地域の果たした役割を、より一層明らかにすることができると考えられる。

<引用・参考文献>

- 石井 淳 1998 「後北式期における生業の転換」『考古学ジャーナル』439
- 石狩市教育委員会 2005『石狩紅葉山49号遺跡発掘調査報告書』
- 石狩市教育委員会 2009『石狩市紅葉山52号遺跡＝札幌市K483遺跡発掘調査報告書』
- 岩崎隆人 1963「石狩郡当別町伊達山遺跡（第Ⅰ地点）の資料」『北海道青年人類科学研究会々誌』No.2
- 岩崎隆人 1964「当別町伊達山遺跡発掘調査略報」『北海道大学考古学研究会連絡紙（ウタリ）』79
- 岩崎隆人 1965「石狩郡当別町伊達山遺跡〔第Ⅱ地点〕の資料」『釧路市立郷土博物館々報』163・164・165号（＊5、＊10）
- 岩崎隆人 1965「石狩郡当別町字樺戸通り出土の土器」『釧路の古代文化』第8集 釧路考古学研究会（＊5、＊10）
- 岩崎隆人ほか1970『伊達山遺跡』当別町教育委員会（＊2）
- 工藤義衛 2022「考古学からみた石狩低地帯」『北海道の自然』No.60（＊13、＊15、＊17）
- 河野本道ほか 1962『石狩町史』上巻（＊13）
- 嵯峨山 積ほか 2018「北海道札幌市東区のボーリングコアにおける上部更新統～完新世の堆積環境と層序」『総合地質』2巻1号（＊14）
- 嵯峨山 積 2022「石狩低地帯の成り立ち：地形と地質」『北海道の自然』No.60（＊14）
- 嵯峨山 積、越田賢一郎、渡井 瞳 2020「北海道石狩平野の縄文時代の海面変化と遺跡群」『日本地質学会第129年学術大会』
- 佐藤由紀男 2015「北海道出土の「大型蛤刃石斧に類似した石斧」について」『弥生研究の交差点』みずほ別冊、大和弥生文化の会
- 佐藤由紀男 2016「磨製石斧の流通からみた紀元前一千年紀の北海道・東北北部」『北方島文化研究』第12号
- 札幌市教育委員会 2015『H508遺跡』
- 札幌西高等学校郷土研究部 1963「当別町伊達山の調査について」『釧路市立郷土博物館々報』137
- 鈴木信・仙庭伸久 2021「縄文文化から続縄文文化へ」『北海道の縄文文化 ところと暮らし』亜細西社（＊18）
- 鈴木琢也 2003「北海道出土の須恵器-北海道開拓記念館出土資料より-」『北海道開拓記念館研究紀要』第31号 北海道開拓記念館
- 鈴木琢也 2004「擦文文化期における須恵器の拡散」『北海道開拓記念館研究紀要』第32号 北海道開拓記念館（＊7、＊11）
- 鈴木琢也 2016「擦文文化の成立過程と秋田城交易」『北海道博物館紀要』第1号
- 高瀬克範 2014「続縄文文化の資源利用—隣接諸文化との比較にもとづく展望—」『国立歴史民俗博物館研究報告』185
- 近田正人 1952「石狩郡当別町遺跡調査報告」『郷土の今昔』5（＊1、＊8）
- 当別村役場 1938『當別村史』
- 当別町教育委員会 1965『当別町伊達山遺跡第2次調査報告』
- 当別町 1972『当別町史』
- 野村 崇 1963「伊達山遺跡調査の意義」『釧路市立郷土博物館々報』137

- 野中一宏 1990「石狩川中流域における縄文時代の石斧製作址について」『北海道考古学』第26輯（＊4）
- 羽賀憲二 1975「札幌市・琴似川流域にあった竪穴住居址群 ―明治中期に作られた竪穴分布図について―」『北海道考古学』第11輯
- 福田友之 2014『津軽海峡域の先史文化研究』
- 北海道開拓記念館 1999『札幌西高等学校郷土研究部・奥野清介氏資料目録』
- 北海道立埋蔵文化財センター 2002『奥尻島青苗砂丘遺跡』
- 北海道立埋蔵文化財センター 2003『奥尻島青苗砂丘遺跡2』
- 森岡健治 2021「石斧をつくる」『北海道の縄文文化 ころと暮らし』
- 森田友忠 1958「石狩附近の遺跡とその分布」『郷土の今昔』8 札幌西高郷土研究部（＊1）

—— 郷土誌類（遺跡・遺物についての記載あり） ——

- 開拓80周年記念誌編纂委員会 1969『茂平沢80年の歩み』
- 高岡部落史編纂委員会 1981『一世紀のあしあと 当別高岡』
- 中小屋部落開基百年事業協賛会 1986『中小屋部落開基百年記念誌 なかご屋』
- 中央部落史編纂委員会 1978『中央部落史 百年の歩み』
- 茂平沢開基百年記念事業協賛会 1990『百年の星霜－茂平沢開拓記念誌』